エプロン通信員2名が卒業することになりました。これからもエプロン通信のご愛読、よろしくお願いします♪

今年度もよろしくお願いします

エプロン通信員・末吉　郁子

このコーナーに参加させて頂いて2年がすぎた。自分の担当の月は、しめ切りに怯え、原稿チェックの会議ではいつも緊張し、ご指摘が入るたび内心「ひえ～」状態でこの瞬間、何度「やめた～い（泣）」と思ったことか。それでも「エプロン通信読んだよ～」の声に励まされ、3年目突入。市内のどこかで読んで下さっているだれかさんと少しつながっている喜び、市民の方々にぜひ知っておいてほしい「こんなこと」があるから、私はこの緊張も含め、もっと勉強したいと思うのです。というわけで今年度もどうぞよろしく。

エプロン通信員・備瀬　真理

まだまだ寒暖の差はありますが、陽気に誘われて外に出ると鶯（うぐいす）も鳴き、季節は春。皆様、どうお過ごしでしょうか。昨年から引き続きエプロン通信員2年生としてお世話になることになりました。2年目、伊江島8合目辺り?でしょうか。いや、〝ふもと〟に立ったばかりの気持ちでフットワーク軽く、自分の足元から見つめていこうと思います。本年度も宜しくお願い致します。

通信員を卒業します

エプロン通信員・城間　ちえみ

平成15年より7年間、通信員をさせて頂いた事に感謝いたします。〝障がい者の問題〟〝心〟〝平和〟といったテーマを中心に書き綴ってきました。書くこと、エプロン会議は、私にとっては修養の場となりました。本当に有り難いことです。これまで私の拙文を読んで下さり、励まして頂いた市民の皆様に心より感謝いたします。「平和」「友愛」「人間主義」の理想を胸にこれからも私は前進いたします。長い間本当にありがとうございました。

エプロン通信員・藤井　真人

突然ですが、今回でエプロン通信を卒業させていただくことになりました。多くの人の目に留まる場でつたない文章を書かせていただく機会を下さったことに今深く感謝しています。もとより社会はいろいろな人間が暮らすもの。この街がより暮らしやすくなるきっかけはさまざまな立場からの視点が大切だと信じテーマを探しました。ひとりの市民として、ひとりの人間として世の中に問うてみたいことはまだまだありますが、それはまた別の機会を探すことにします。一年間本当にありがとうございました。

茶（ちゃー）ぐわーゆんたく 72

宜野湾と那覇の水争い

宜野湾市に水道が開通して、今年で50年になります。水道の給水は1960（昭和35）年に始まりましたが、宜野湾市にはそれ以前に、もう一つの水道にまつわる話があります。

戦前の宜野湾村（当時）などの農村では、自然の湧水や雨水などから生活用水を得ていました。なかでも西海岸は湧水が豊富で、付近には水田が広がり、早魃（かんばつ）の際には他の字（あざ）からも水汲みに人が集まりました。

その一方で、当時の那覇市では、都市化による水不足が大きな問題となっており、上水道の整備が計画されました。その水源地に選ばれたのが宜野湾村、浦添村の西海岸の湧水群で、那覇市は1929（昭和4）年8月、大山のオーグムヤーなどの湧水の使用を宜野湾村に求めました。村では、水道に取水されると水田への水の供給が減り、旱魃時にも利用できないと拒否しました。その後も交渉は続き、生活に直に関わる大山、真志喜の人々は強く反対し続けました。ついに那覇市が、水源地を強制的に取得するための旧土地収用法の申請を始めると、1932（昭和7）年11月、怒った宜野湾村民200余名が、那覇市役所に押しかけ抗議するという事態にまで発展しました。その後、那覇市に押し切られ、1933（昭和8）年9月には、宜野湾村の水源から那覇市に水が送られるようになりました。

3年以上にわたるこの騒動からは、当時の水問題が生活に関わる死活問題であったということが伝わってきます。現在、水に不自由しない生活を送る私達が、この騒動から学ぶべきことがあるのではないでしょうか。

▲水源地の一つ
オーグムヤー跡（大山）

▲ 那覇市へのびる水道管
（宇地泊の河口付近）

『宜野湾市史』への問合わせ
教育委員会 文化課 ☎893-4430